

柳田國男と宮本常一の旅概念を 導きの糸とした観光政策の所在

岩 崎 早 穂

概 要

本稿では柳田國男と宮本常一とを旅学、観光学の嚆矢と捉え、彼らの旅概念を通して今後の観光政策の拠り所について考察する。観光立国宣言から約 20 年が経とうとする今、観光公害問題や訪日韓人観光客の激減など、従来型の観光は変化に直面しており、これに即した変化が観光政策に要請されている。迎えた転換点に際し、今一度観光政策の在り方を見つめなおす必要がある。明治から昭和にかけて日本全国を旅した柳田、宮本が旅を通して何を学び、何を後世に伝えようとしたのかを知ることは、今日まで続く観光の諸形態と観光政策とを考察するうえで欠かせない行程である。柳田と宮本の旅には、土地の人々の暮らしに対する尊敬と共感、驚きがあった。自分の世界になかったものを獲得しにいくことを、彼らは学びと呼び、その獲得が国民総体の幸福の実現、すなわち公共の福祉に繋がると考えていた。今日でいう公共政策的発想の柳田とソーシャルイノベーション的発想の宮本とで接近する方法こそ差異があれど、彼らの構想した旅の学問はまさに公共政策であり、観光政策の今後の方針に大いに参考されるべきものである。

1. はじめに

2000 年代以降の約 20 年間は観光の時代であったと言っても過言ではない。2002 年の観光立国宣言以降、観光業は今や国家の産業構造を支える一つの大きな柱となっている。一方で、急激な「観光地化」は観光公害などの歪み

も生んでいる。2018 年以降は隣国、韓国との政治的課題によって観光業に大きな影響が出るなど、従来の観光の形が揺らいでいる。この転換点をひとつの機会ととらえ、従来の観光の在り方、観光政策の在り方を見直し、今後の観光業と観光政策の未来を描く必要がある。本稿では以上の問題意識のもと、明治から昭和にかけて日本全国を旅した柳田國男と宮本常一とを旅学、観光学の嚆矢と捉え、彼らの旅概念を導きの糸としながら、求められる観光政策の所在について検討する。

本稿では、観光、旅行、旅の語を用いる。この 3 語の定義は、宮本の整理を援用することとする。旅という語は旅行の古い語であり、旅行は、所要のための旅行、帰省のための旅行、観光旅行の三つに大別される（宮本 1975）。その内、観光旅行とは、自分の住んでいる世界以外のところを見に行くことを指す（宮本 1975）。すなわち、旅行と旅とはそれぞれ延長線上に位置し、観光はその中の一種で、自分の世界にないものを見に行くことだという見方である。さらに観光は贅沢な空間で解放感を味わうものと、学びを得るためのものの二種類があると宮本は主張する（宮本 1975）。本稿でも旅と旅行との語義に特別な差異を設けず、目的をもって出かけることを旅、旅行とする。観光は、旅、旅行の中でも、解放感や学びを求めて自分の住んでいる世界以外の場所を見に行くことと定義する。

本稿の構成は以下のとおりである。2 章では柳田の旅概念について考察する。1 節では先行研究を中心にその展開を整理し、2 節では「遊海島記」を通して柳田の旅における学びについて検討する。3 節では『青年と学問』を通して、

柳田が目指した旅の概念を整理し、2節とあわせて検討することで、柳田の旅概念を深める。3章では宮本常一の旅概念について考察する。1節ではその土台となった半生を、宮本の自省と先行研究をもとにみていく。2節では宮本の旅スタイルに、3節では宮本の旅概念における学びに重点を置いて考察することで宮本の旅概念に迫る。4章で両者の共通点と相違点について整理し、5章の観光政策への考察につなげる。

2. 柳田國男の旅概念

2.1 柳田の旅

柳田の旅は、よく二種類で整理される。官僚としての旅と、自主的な旅である。あるいは、自主的な旅はさらに朝日新聞社友時代の旅と民俗学の講演のための旅に整理される(米山 1973)。一方、宮本常一は「柳田國男の旅」のなかで以上の二つの旅とは別に「和文脈の旅」という視点を提示している(宮本 1979)。当時の学問的教養の文脈には、武家的な漢文脈と農商的な和文脈の二種類があり、柳田が幼少期に親しんだのは後者、すなわち和歌や小説、稗史、紀行、世事、隨筆などであったことから、彼をして空想たくましい少年たらしめた(宮本 1979)。のちに旅の中からあらゆる情報を読み取った柳田の素地はここで養われたのである。そしてこの空想力は読書によって得られたイメージを確認しようとするかのように、何かを詮索する形の旅として現れる(宮本 1979)。養家である柳田家の源流を求めた長野の旅¹において、土地の豪農の武士化に伴う変化と来し方について探ったことは、柳田の史眼を確かなものにしていくうえで大きな役割を果たした(宮本 1979)。この詮索と史眼は柳田の旅の中で欠くことのできない視点である。

官僚としての旅は、官僚としての職務を兼ねる、あるいはその合間を縫った旅(米山 1973)であった。宮本は当時の柳田の姿として、紋付き袴、白足袋姿であったことに触れている(宮

本 1979)。柳田を迎える人々が見た「荷物持ちとお供がついた旅人」は普通の旅人ではなく(宮本 1979)、「講演会をされる柳田先生」の旅は一種の大名旅、貴族旅とも評される(米山 1973)。

しかし、こうした背景にもかかわらず柳田の論考が豊かであるのは柳田のもつ感受性、コミュニケーション力によるところが大きい(米山・神島・伊藤 1973)。他者と対等でありながら、自己と他者との距離をとる、すなわち自己相対化に努めることで、相手に共感しながらも他者として相手のものの考え方、感じ方を観察するという科学的な一面が柳田にはあった(米山・神島・伊藤 1973)。時代はくだり、官僚としての旅の時期からは外れるが、象徴的なエピソードがある。宮本は柳田の「水曜手帖」より、子供に何か言わせてみようとして小学校が遠いかと尋ねたときのことを引いて、「柳田はこうして多くの人に声をかけたのであろう。構えて言うのではなく、不用意に言う言葉の中に多くの真実があった。柳田の旅はこうにして道端の人に声をかけることが、一つの根幹をなしていたのではないか」(宮本 1979: 112)と述べている。子供は自身の情報提供に対し御礼もないのかと主張したが、柳田はその意図をわかった上で、ただ自分が質問したのは学校への道ではなく、毎日どれくらいかけて学校へ通うのかであったのだと述べた(柳田 1968)。ここから、その土地に暮らす人の生活について識ろうとする柳田の姿勢と、相手が誰であっても対等に会話をした様子、子供の思考回路を観察し、それを記憶していたことが読み取れる。共感と他者としての観察とを両立し、またこれを両輪とすることが柳田の論考において鍵であった。

自由な旅の経験を著したものとしては「雪国の春」「秋風帖」「海南小記」の紀行三部作が代表的である。19年間に及ぶ官僚生活を終え、ようやく自身の心のままに動けるようになった旅は、柳田の学問的発見に大きく寄与した(宮本 1979)。米山は、この三部作の中に柳田の関心領域や問題意識²のほとんどすべてが含ま

¹ 長野県へは講演で訪れている。

² 沖縄、物質文化、先祖と家など(米山 1973)。

れるという主張している（米山 1973）。この時期の旅で柳田なりの旅のスタイルを確立していったものと思われる。自由な旅初期の旅先、佐渡では観光地を取って避けて旅をする「偏土の旅」³を行っていた（後藤 1979）。柳田は偏土の旅を通じて見たこと、聞いたこと、感じたことを書いた紀行文が、同じ日本に住みながらも全く気候風土の違う人々の目に留まることを祈念したのである。

その後1921（大正10）年に柳田は国際連盟の仕事でジュネーブに向かう。ヨーロッパ旅行により、柳田は外から日本を眺める機会を得、そのうえで民俗学に全力を挙げる必要性と、自分だけではなく民衆⁴全体がそれに取り組むべき意義を感じ、それが翌年の盛んな講演活動に結びついた（宮本 1979）。本稿で扱う『青年と学問』の基礎となった講演もこの時期のものである。この時期には積極的に他者にむけて旅を推奨する様子がうかがえる。しかし帰国翌年の1925（大正4）年に治安維持法が制定されるなど、奇しくも世の中は全体主義的方向に大きく舵をきっていく。柳田の論考とこうした事情とを適切にとらえていく必要がある⁵。

その後の柳田の旅は民俗学のための旅であった。民俗学の講演の傍ら、全国を歩いた。しかし、柳田の旅は、一か所にとどまって土地の古老から細やかな聞き取りをするようなことは少なく、歩きながら見た風景、村の様子、人の所作について、荷物持ちなどから話を聞くスタイルであった（宮本 1979）。それは柳田の経歴と境遇が、そうした参与観察的な調査に向かなかったためであるが、むしろ柳田の方法により理解される彼らの生活は一変の詩のようであったと宮本は評している（宮本 1979）。後述するが、このように指摘できるのはまさしく一か所にとどまって古老らの話を細やかに聞くことを大切にしてきた宮本だからこそのものであり、そこに彼らの旅概念、旅から得る学びに対する態度の違いがみられる。

以上の通り、柳田の旅に関する先行研究は多

いのだが、柳田の学生時代の旅に触れている論考は少ない。柳田の初めての紀行文は「遊海島記」であったが、これについては伊良湖岬に椰子の実が流れ着いていたのを見た経験が「海上の道」執筆につながったことや、島崎藤村の「椰子の実」に結びついたことなど、椰子の実の漂着に着目した論考が目立つ。

しかし井口は「遊海島記」が柳田の旅の始原であったという（井口 2018）。米山は「柳田の旅の本領は、若い頃の渡り鳥のような、“青春彷徨”にあるのではない。むしろ、その“旅らしい旅”は、一人前のオトナとして社会生活のなかで行われた」（米山 1973：67）というが、これは柳田が1890年代～1920年代辺りの30～40年を指して旅の黄金期と言い、日本各地をあるいてまわった旅こそが旅であると考えていたことと、後に柳田が薦める旅の姿に最も近い形で行われた旅が紀行三部作の旅であったと考えているためであろう。しかし、米山のいう青春彷徨をこそ、柳田は誘発しようとしていたのではないか。であるならば、すなわち、柳田の旅の始原すなわち「遊海島記」をみることは、柳田が後の世代に継承せんとする、旅における学びの中身に柳田自身の経験から接近することにつながる。

さらに、官僚としての旅を終え、自由な旅のうち初期の国内旅行とヨーロッパ旅行とを終えた柳田が深めた旅概念が反映されていると考えられる『青年と学問』とあわせて考察することで、柳田の旅概念と政策への示唆へとつなげたい。

2.2 「遊海島記」と柳田の学び

「遊海島記」の初出は、1902（明治35）年、雑誌『太陽』に掲載された「伊勢の海」である⁶。1898（明治31）年夏、当時24歳の大学生であった柳田は夏のふた月近くを愛知県渥美半島の先にある伊良湖岬で過ごした。「遊海島記」は当時の経験を基に著された、初めての紀行文であ

³ 柳田自身も1929年に書き加えた附記において、「名所舊蹟の巡拝は割愛して、成るだけ偏土をあるいてみよふというのが、此旅人の小さな發願であった」（柳田 1962：477）と述べている。

⁴ 宮本は「民衆」と表記しているが、柳田の「常民」に対して宮本は「民衆」の語を使い続けたことには留意が必要である。

⁵ 宇都宮中学校で行った講演の題目は「国を愛する者の学問」であったが、そのことが論考の中身を愛国主義と直結させるものではない。

⁶ 1908（明治41）年、雑誌『文章世界二十八人集』に収録される際に「遊海島記」と改題。

る。当時、読書家は大抵旅行家でもあったという（柳田 1998）が、東京帝国大学に通い、新進気鋭の新体詩人でもあった柳田の周囲⁷では方々を歩く旅行スタイルが流行していた。

「遊海島記」の附記で柳田自身「初めて旅らしい旅をした」（柳田 1962：477）と述べている北常陸旅と、田山花袋と共に過ごした日光旅における記述を見ると、北常陸では海洋気象台長の岡田武松をいわば「ガイド」に海岸を、日光への道では草原の村を歩き、日光では「谿の流れ山の樹の色々な姿を見」（柳田 1962：477）で過ごしている（柳田 1962）。ここまでの旅においては特に自然景観について述べている一方で、伊良湖旅では「初めて荒濱に働く人たちの朝晩の生活にまじった」（柳田 1962：477）とあるように、旅においてそこに住まう人々と生活を共にするという経験をしている。この一文を附記したのは、この経験が柳田の印象に強く残ったためであろう。計画的な旅行は官を罷めた以降（柳田 1962）であり、それ以前の北常陸と日光の旅にわざわざ比して記述していることから鑑みるに、この体験は柳田の旅のひとつの転換点であった。この点において、柳田の伊良湖旅は重要性を持つ。

井口は「遊海島記」のなかに、経済史学に対する脱経済史学、民俗学に対する脱民俗学的な記述がみられると述べている（井口 2018）。柳田の学問の根底にあった経済史学と、柳田が育てた民俗学とを前提に、それらとは重なりきらない柳田の姿勢が、初期作品である「遊海島記」にも垣間見えるという（井口 2018）。椰子の実の漂着が「海上の道」に繋がり、民俗学と民族学との架橋となる試みであった点、漂泊者としての柳田の、同じ漂泊者への共感と哀愁、農村はモノカルチャー経済であるというステレオタイプに対する反証、芝居の力強さとその意味に関する考察を例に挙げ、「遊海島記」という作品がもたらす示唆を指摘した（井口 2018）。

本稿では、「遊海島記」において柳田の発見よりもむしろ感動に重点を置く。柳田は伊良湖旅以前の旅と比して、伊良湖のおよび指呼の距

離に浮かぶ神島の人々と生活をともにしたことを強調していた。新しい事実の発見がその後の柳田に及ぼした影響については、先行研究が明らかにしたとおりである。これを踏まえ、本稿は柳田が何に心を動かされたのか、見聞いた事実から何を考えたのか、感動の表現に焦点を当てて文章を抜き出し、分析することで、柳田が何に心を動かされたのかをみる。

分析にあたり、感動を特別に感情が動いた点とみなし、直接的な感情表現に加え、詠嘆を表す「ん（む）」「や」などの現代語では使われない表現に留意し、文脈上強い感情が含まれると思われたものを同等として扱っている。方法としては、「遊海島記」本文をその内容のもつ意味ごとに分けたブロックを作成、ブロックが持つ性格を抽出するものである。抽出したものの中から柳田の感情表現が含まれるブロックを抜きだし、再構成することで、中心的概念であった「哀」「喜、楽」について考察する。

遊海島記における柳田の感情表現をみると、喜怒哀楽の「哀」の表現が最も多くみられる。それらは哀を感じる対象別に、漁民の平穩無事への哀、生計を立てることへの哀、忘れられゆくことへの哀に分類できる。

漁民の平穩無事への哀とは、荒磯である伊良湖崎周辺で命を落とした船乗り達、そして残された家族への哀と、常に死と隣り合わせである船乗りとその心配をする家族への哀である。荒磯、難破、墓といった形で度々表れるこの悲哀の感情は「遊海島記」に底流するひとつのテーマである。しかし、生業である漁業をやめることはできない。危険と隣り合わせであっても生きねばならないことに対する哀を柳田は感じた。加えて、島の石灰を売って収入の足しにする生活は、永久に続けていくことはできない儂い生活である。ほかに致し方はないのだが、島の生活の儂さ、哀しさに柳田は心を打たれた。それが生計を立てることへの哀である。また、島には海で命を落とした旅人や、遠い昔は神と崇められた詩人が時間の経過とともに忘れ去られゆくことへの哀悼も強く抱いている。柳田自身も旅人であり、また詩人でもあったことから、

⁷ 当時こうした旅行をしていた先輩として田山花袋を挙げている。田山は柳田が伊良湖に向かう直前の日光旅に同行しているほか、柳田の伊良湖滞在中にも訪ねてきている。当時の体験をもとに書かれた作品に、「伊良湖半島」がある。

思い入れもひとしおだったと読める。

また同様に喜、樂を取り出してみると、伊良湖、神島への懷古、島の人々との交流、芝居の日の高揚の羨ましさがある。特に後半、島の青年たちと長屋で互いの話をし、彼らが贈り物を持ってきてくれることにはそれぞれ嬉しいというストレートな表現を用いている。前半は翁から話を聞いた、などの記述がみられたのが、青年たちとの交流を記述する際には、彼らの話を聞き、自分からも話をしたという双方向の交流があったという記述に変化していることから、彼らとの対話が柳田の心に大きく響いたと考えられる。そして、伊良湖で感じたあらゆる哀愁の念にも関わらず、この地を懐かしむ柳田の記述は、人々と過ごした幸せな記憶であったことを物語っていた。

以上を踏まえて、特に柳田の心を大きく動かした要素は漁民の生活の儚さと人間の生の儚さ、時の流れで忘れられ行くことへの哀しさと共に、自分とは異なる境遇の人々との交流の嬉しさであったと考えられる。その背景には、記述されたすべての内容に対する驚き、発見、共感があった。

2.3 『青年と学問』と柳田の旅概念

『青年と学問』のなかに「旅行の進歩及び退歩」がある。旅と学習を中心とした論考であり、1924（大正13）年に栃木中学校および宇都宮中学校にて行った講演を基に書かれた。よって、まさに青年に向けた言葉が収録されており、ゆえに啓蒙的な側面を多分にもっている。

1919（大正8）年に貴族院書記官長の職を辞したのち朝日新聞社へ入社する条件として提示した「旅」を終えたのが講演の前年である。日本国内の旅に加え、欧州旅行を経て感ぜられた柳田の憂慮や希望が如実に表れ、当時の柳田がもっていた旅の概念が凝縮されている。

柳田は旅行を「人を知ること」ととらえた。「可愛い子には旅をさせよ」という諺はすなわち、旅はつらいものであるが、子を思うならば旅を経験させよという言であり、また同時に古

くは子が旅行することを望まなかった風潮があったことを指摘している（柳田 1998）。親が子を苦勞から遠ざけたいと願うことは無理もないが、保護のあまりに世の一部から隔離してしまうのは、人間とは何ぞや、人間はいかにして生活するかという問いからも多感な青年を隔離してしまう（柳田 1998）。そうではなく、むしろ時間があって物事について考えられる青年期にこそ世の中を知るべきだという（柳田 1998）。ここで知る対象となっているのは「人間とは何か」「人間は如何にして生活するか」である。これはすなわち、柳田自身の学問の最大の疑問である。旅を通して、人間に接近すること、人間について学ぶことを求め続けたひとつの結実が、柳田の民俗学であった。

では、人間の生活とは、具体的にどのようなことを指しているのだろうか。旅でまずぶつかるのは「世間」、「世の中」というもので、生まれた時から同じものと接してきた者がそこから抜け出してものを考えた時にはじめて、自分と周囲との関係が少しずつ分かってくるのだという（柳田 1989）。柳田は、農山漁村の自省の学が弱まっており、それを補完していかなければならないと語っている（柳田 1998）。この講演が当時の中学校に通う生徒に向けて語られていたことを鑑みるに、柳田は、今後はエリート層が農山漁村の暮らし方、自省の学を補完する役割を担っていかねばならないと考えていた。柳田自身もまた、エリートの道を進んできた人間である。知らねばならぬことがたくさん残っているのに、人の一生は短く、柳田自身の計画の一部分を「後から来る諸君の誰かに、引き継いでおかねばならなく」（柳田 1989：43）になったと前おいて、青年と旅について説いた中には、特に自身と似た出自の者に対して自身の経験を共有することで後継者が育つことを祈ったといえる。ここでいう「諸君」とは、この論考を読むあらゆる読者であることはもちろんだが、主たる読者たる、あるいは講演で目の前にした青年に対しての意味を大きくはらんだ言葉であった⁸。そのことは、旅に求める質にも現れている。

⁸ 当時は費用が安かったとはいえ、旅に出られるということは、日頃から労働に従事せずとも食べていけるということであり、それだけで恵まれた存在であったことも重要である。

柳田は旅を読書にたとえ、その重要性和し悪しにも言及している。良い旅とは、それによって自分のみならず社会にもより良いことが齎されるものであるという（柳田 1998）。この点が柳田の旅概念の中でも特異な点の一つであるといえよう。また、良い旅人とは、旅行というものの意味を知って、短い時間の中でも心を留めて見て歩く人のことであり、心がけ次第では自分の周囲からさえも学ぶことができると述べている（柳田 1989）。すなわち、旅行とは人々の生活に対する学びであると同時に自らと社会とをつなぐための学びでもあることを自覚し、旅で得る情報を体系化していく人をよい旅人としてとらえているのである。良い旅人が良い旅をできるように、旅行組合を作ることも提案している（柳田 1998）。旅行組合に加入している者同士で良い旅を支えあうことを目的とした構想である。現代でいうところのユースホステルに似た場の創出を柳田は画策していた。この場でそれぞれが得た知識を総合し拡散させることで旅人の学びが深まると考えてのことである。学びを広く世に還元していくための仕組みには、ただ単に旅に出て新しいものを発見すること以上に社会の改善を重視した柳田の旅概念がよく反映されている。

3. 宮本常一の旅概念

3.1 宮本の旅

宮本の歩いた場所を、白地図に赤インクで示したならば、全体が真っ赤になるだろうといわれる（渋沢 2005）。宮本は生涯で16万キロの距離を歩いた（佐野 1996）。宮本は周防大島の出身である。職を得て以降も休暇には大島で百姓をし、晩年には「周防大島郷土大学」を開講するなど、生涯大島の暮らしを自身の基盤としながら、日本各地を歩いた。先行研究が豊富な柳田の旅に比べ、宮本の旅に関する論考は未だ少ない。

宮本の旅は、とにかく見て歩くものだった。

旅のスタイルが時期ごとに少しずつ変化していった柳田に対して、宮本の旅は一貫してとにかく歩く中から情報を拾っていくスタイルであった。そこに最も大きな影響を与えたのが、宮本の父だ。宮本の父は1年に二、三度一人旅に出る人で、西は宮崎、東は日光まで行ったことがあったという（宮本 1993）。父にとっては旅が師であり、宮本自身を旅に出させたのも旅に学ばせるためであったと振り返っている（宮本 1993）。親元を離れる際、宮本が父から言われた十か条のうち四つは宮本のその後の旅に直結した。その四つとは、汽車の窓から見える風景、駅に乗り降りする人の服装、荷置き場の荷を見ることや、新しい場所を訪ねた際は高いところに登り、目を引くところに行ってみること、時間のゆとりがあれば歩くこと、である⁹（宮本 1993）。これらは全て、その土地の人々の暮らしの情報に通じる。宮本の旅は一貫して人の暮らしがどのように営まれているかを見るものであったが、その土台は父の教えにより形成されたものであった。

人の暮らしに興味をもって歩き始めたのは、大阪に出て郵便局に勤め始めてからだ。1923（大正12）年、宮本は叔父を頼り大阪に出て通信講習所に通い、卒業後は大阪の郵便局に勤めた。そこで見る電報配達用の住民簿をきっかけとして、大阪のあちこちの路地裏を歩くようになったのである（佐野 1996）。住民簿に記載された場所にはどんな人が住んでいるのか、思いを巡らせては実際に歩いて回ったこの経験は、そこに住む人の暮らしに興味を持ち、見て歩くという宮本の旅を支える大きな柱を育てていくこととなった。大阪の路地裏の長屋に住む人々の暮らしはその後零細民の民俗に興味を持つ原体験となっていた（佐野 1996）。その後天王寺師範学校を経て教職について以後も宮本は歩き続け、この積み重ねが師、柳田國男と渋沢敬三との出会い、アチックミュージアムへの入所、民俗学へと宮本を導いてゆくことになる（佐野 1996）。

宮本は小学校を出た後1年間を、農業をして過ごした（宮本 1993）。島を出た後も休暇の

⁹ 挙げしていないその他六つの教えも含め、宮本は生涯この言葉に従ってあるき続けた（宮本 1993）。本来は十か条でひとつの教えのところを、紙幅の関係上、ここで触れるのは以上とする。

折には農業を手伝いに戻り、旅先でも自信を大島の百姓と名乗った宮本にとって、百姓であることはアイデンティティであり、そのままそれは、社会を見る視点でもあった。すなわち、宮本が旅で見ることの出発点は、その場で人が如何に生きているかを見ることであり、それはすなわち人々が生きていくとはどういうことなのかを見つめることに繋がっていたのである。さらに、百姓としての知識、知恵はそのまま旅先での交流の話のタネとなった。同じ話題に対してあれこれ意見交換ができることは、旅先の人々にとっても有益であった。

宮本の旅はそのほとんどが調査、あるいは講演のための旅であり、そこで交流は多くが「調査結果」として結実すべきものであった。宮本はくる日もくる日も昼夜を問わず老人相手に話を聞き取っていた（神崎 1993）。調査にあたり足繁くそこに通い、暮らしを見つめることを重視したそのスタイルは、同じ人に対しても、同じ土地に対しても、繰り返し見聞きすることで真実に迫ろうとしていた点で、柳田とは異なる。何度も会話することで生まれる信頼関係を重視する宮本の学びは、必然的にその場に長く留まる、あるいは再訪することで構築されていた。世に出るものは調査結果であっても、そこには血の通ったコミュニケーションがあった。

宮本が観光に関心を持つようになったのは1960（昭和35）年以降のことであった（宮本1975）。旅や観光に関連する著作も1960年代後半、すなわち昭和40年代前半に集中する。この時期は、交通網が整備され、短時間で広範囲の移動が可能になった時期であるとともに、神武景気と呼ばれた好景気を経て人々の生活がだんだんと上向いていった時期であり、人々の関心が余暇の使い方に向かい、旅行人口が増えた時期に重なる。この時、旅行や旅、観光は大きな転換点を迎えていた。

宮本の著作集の中に、『旅と観光』『旅にまなぶ』の二冊がある。本稿では、宮本重視した旅のスタイルと、宮本が強調していた旅における学びがどのようなものだったかについてこの二冊より考察する。

3.2 『旅と観光』と宮本の旅概念

『旅と観光』は、転換点を迎えていた「旅行」の中から特に新しく登場してきた観光に注目して編まれた一冊である。その中には各地で行った講演を基に書かれたものも多く、観光業に携わる人々に対するアドバイス、今後の方向性の示唆が具体的に表れている。本稿ではその中でも特に宮本自身の旅スタイルに関して言及した部分と、人々への具体的アドバイスから彼の旅と観光観をとらえようとする。

若い頃から貧乏旅行をし、貧しい人々と生活を共にするような旅をしてきた宮本は、その人々たちから離れた時にひとり豪華な宿に泊まることを決してよしとしなかった（宮本 1975）。宮本にとって旅とは、現在目の前にいる人との交流であり、同時に過去に交流してきた人々と共にあるものでもあった。宮本の中には交流の中で蓄積された知識があった。それを旅先の人々がもつ知識と交わせることで双方に具体的学びを生み出したのである。このことは後述する。豪華な宿に泊まることがなかったのは、人々の暮らしについて少しでも多くの情報を集めようとした側面もあろうが、それ以上に旅を通して繋がってきた人々との関係性と知の交流を楽しもうとした結果でもあった。宮本が重視した、人々と接し、物を見、学び、自分や村のために役立てる旅は、明治以降数少なくなったものの、1965（昭和45）年当時、学生、若者を中心に再び増加傾向にあった（宮本 1975）。これを指して、日本にもようやく「本当の民衆の旅行」がはじまろうとしている、この気運を反映した観光開発が必要だと主張している（宮本 1975）。

「九州の観光資源とその将来」のなかで宮本は、観光資源に手を加えなければ観光対象になりえないと述べた。苦勞して旅をしていた頃は、大変な思いをして歩いていく中で出会う美しい風景には価値があった（宮本 1975）。しかし、交通が便利になった現在、明光風眉な景色というのはむしろその場の交通の不便を示すものであり、人々が暮らしていくのには不便だということである（宮本 1975）。

宮本はとにかく歩く旅、貧乏な旅、苦勞する旅を好んだ。しかしそれはそこに暮らしている人々が使う動線、使う道や資源を利用した旅な

のであって、旅人のために用意されたもの、すなわち観光旅館などを利用することを避けた。そこには、まずそこに暮らす人々の暮らしを敬い、彼らの暮らしに溶け込むことを旅のスタイルとした宮本の哲学を感じられる。ゆえに、風光明媚な場所は不便な場所だと言い切り、そこに開発の余地があると言えるのである。宮本にとって、住民が不便する観光開発は、住民のためにならない上、旅の本来の意味からもその目的からも離れゆく百害あって一利ないものであった。

3.3 『旅に学ぶ』と宮本の学び

宮本は「旅の遺産」の中で「旅本来の姿は自分たち以外の民衆を発見し、手をつなぐものであったことを忘れてはならない。昔はその中に自分を、また世の中を発展させる要素を見出していった」と述べている（宮本 1986：242）。宮本が旅の中で発見したものの多くは民俗学の成果として実を結んでいるが、宮本の学びはどのように形成されていったのか。

宮本が言う旅に学ぶとは、「旅先で、そこに生きている人びとの生き方にふれてみる」ことであった（宮本 1975：123）。そうして訪ねてきた旅人を迎える、いわゆる民宿もかつては各地に数多くあり、そこに旅人との交流が生まれたのである。旅人は各地から新しい知識を持ってきてくれる存在だった（宮本 1975）。旅人は土地の人々の相談相手となり、そうして旅人と旅先の人々の結びつきが生まれていった（宮本 1975）。宮本自身も百姓の経験から、旅先にすぐに馴染んでいったのだという（神崎 1993）。自身の持つ知識と、旅先で得る知識とを交流させ、新しい知を構築していくことが、宮本のいう学びであった。そうして創出された知は、その土地の蓄積になるほか、宮本自身の蓄積として集約され、様々な形で拡散されていった。

「旅行のうちに」の原題で 1965（昭和 40）年に発表された「民俗事象の捉え方・調べ方」には、旅の中で見るポイントが整理されている。その中で最も重要だとしているのが「見る」ことである。高いところから見てまず目に留まったものを覚えておき、後で人と話をするとときにそのことを話すと話し手に安心してもらえる上、話

の理解にも役立つのだという（宮本 1986）。見ることで入れた前知識によって、聞き取りが豊かになり、こちらの質問だけではなく相手が話したいことを話してもらえるようになる（宮本 1986）。問わず語りを引き出すのは容易ではないが、そうして対話するからこそ、旅先の人との良好なコミュニケーションを構築し、旅先の人の味方であることができた。

4. 柳田國男と宮本常一の旅概念における共通点と差異点

柳田、宮本ともに強調していたのは旅を通して学ぶということである。旅を通してそれまでなかった視点や気づき、知識を得ることが、旅の役割であった。そうした学びは旅先の人々の生活の中から得られるものであり、そこに直接接近できるのが旅という方法であった。彼らが旅を通して見つめようとしたものは人々の生活であり、両者ともそれが人間としての成長にもつながると考えていた。また同時に、こうした学びを得る人間が少なくなっていることを憂えてもいた。

しかし、旅のスタイルと学びの方法には差異が認められる。彼らの歩んできた道の違いは、豊富な読書経験を端緒に育てた自身の観察眼を頼りに旅先に入り、ある種の才能とも言える高い共感力とコミュニケーション力を武器に様々な情報を引き出す柳田と、自身の経験に裏打ちされた高い共鳴力と、人々との密な交流の中から情報を拾い上げた宮本という方法論の違いとなって表れた。また、柳田が一国民俗学の確立を目指した旅、学びを志向したことに対して、宮本は旅先の人の味方として、民衆の暮らしを豊かにするための旅、学びを志向した。

柳田はエリート層に旅で学ぶことを推奨した。人々の生活に関する知識の収集、さらにその先にある自省の学としての民俗学を想定していた。柳田の旅のスタイルを後継しうるのは、各地を体系的に旅し、その知識を整理し、活用するレベルで管理しうる人物、あるいは組織であった。知識を総合し、活用できる形に整備するという発想は、一種のインフラ整備事業の発起であった。

対して宮本はむしろ旅先の人々との知的交流

による発展を重視した。個人の学びの蓄積はさらに別の旅人との共有を経て交流され、また同時に土地にも蓄積される。その学びが人々の生活を向上させてゆくことを宮本は目指していた。宮本の方法では、如何にその土地の人が努力をするかという要素に結果が強く左右されるが、全国各地に数多の潜在的担い手がいる。あくまでもその土地に生活する人々の生活を向上させていくのは人々の自主性によるという考えがそこに読み取られる。宮本は柳田の弟子のひとりに数えられるが、柳田の常民という概念を用いたのに対して一貫して民衆という語を用いたことも、こうした思想によるものではないか。

宮本は、旅、あるいは観光を、旅人のためのものではなく、旅人と旅先の人に直接、利益が還元されるものとすることを目指した。柳田は旅による知的交流が人々の生活に与えた影響を認めつつ、一方で知の体系化を優先する姿勢をとっていた。

方法に違いがあれど、二人が目指していたのは、柳田の国民総体の幸福の言に代表される、人々の幸福であった。その追求のための道筋の中に旅があり、人々の生活から得る感動、尊敬、共感に基づいた学びを最も重視していた点で、旅学、観光学は公共政策に繋がる。

5. 観光政策の所在

現在の観光政策はインバウンド増を求める事業への比重が高い。しかし、観光を支えるのは国内をよく知り、それを活かしていくことである。外部への発信と内今やその土地のことをよく知る者がその土地にさえ少なくなっている。その土地の魅力を発信しようとする観光業において、最も基礎となる事項が、土地を知ることである。観光政策は外部に訴求する政策であるかのように思われるが、同時に内部へ向けても展開される必要性がある。柳田が言うように気を付けてみて歩くようにすれば、自分の身近からでも学びを得ることはできる。昨今は住民が自身の住まちを再発見しようと「観光」する取り組みも増加してきた。しかしこの「イベント」に公的資金を投入するか否かという問題が同時に各地で議論になっている。自身の住まちに関して学ぶこと、次の世代へその知識

をつないでいくことは税を使って行うべき事業なのか、そこには「公共」の認識問題、地方公共団体あるいは住民による自己投資的性格をもつ政策にまつわる問題が絡んでいる。

また、観光政策は経済的側面をその範疇に含めることは事実であるが、それ以上に、政策をもって国内の観光を経済効果追及に偏することなく豊かにしていくことが求められる。観光資源の開発、整備のための政策が重要視されるべきであることはもちろん、加えて、観光を通じた学びを支援するための政策にも注力すべきではなかろうか。すなわちそれは、旅先である観光地と旅人である観光客との交流を創出する政策になる。観光において、ヨソモノの視点は重要だとされるが、これは、旅人が持ってくる新しい知識を旅先は歓迎したという宮本の論考に繋がっている。旅先と旅人の交流が恒常的に創出されることは、長期的にも観光を支える土台となる。

しかし、言葉でいうよりも実現は困難だ。まずは観光を通じた学習の現代的課題を洗い出し、学習機会をどのように創出するのかを検討する必要がある。次に、その学習機会創出の実現可能条件をだれがどのような形で担保するのかを検討しなければならない。しかし、これは政策の実施によって人々の生活に何かしらのインセンティブが与えられる性格を持たない。ゆえに、形骸化しやすく、目標の設定とモニターがしづらいという難点も内包している。旅における学びの出発点は、その土地の人々への共感や感動、尊敬である。本末転倒とならないためにも、柳田、宮本の旅概念を拠り所として常に参照し、今後の観光政策を慎重に検討する必要がある。

参考文献

日本語文献

- 井口貢（2018）『反・観光学 柳田國男から「しごころ」を養う文化観光政策へ』ナカヤニシヤ出版。
- 神崎宣武（1993）「解説」宮本常一『民俗学の旅』237-247、講談社。
- 佐野眞一（1996）『旅する巨人宮本常一と洪沢敬三』文芸春秋。
- 洪沢敬三（2005）「我が食客は日本——努力の民俗学者宮本常一君のこと」佐野眞一『KAWADE 道の手帖 宮本常一』84、河出書房、初出 1961 年。
- 宮本常一（1975）『旅と観光』『宮本常一著作集 18』未來社。

宮本常一（1986）『旅にまなぶ』『宮本常一著作集 31』未来社。

宮本常一（1979）「柳田國男の旅」牧田茂『評伝柳田國男』103-112、日本書籍。

宮本常一（1993）『民俗学の旅』講談社、初出 1978 年。

宮本常一（2015）『宮本常一座談録 生活文化』八坂書房、初出 1968 年。

柳田國男（1962）『遊海島記』『定本柳田國男集第 4 卷』筑摩書房、初出 1902 年。

柳田國男（1963）『水曜手帖』『定本柳田國男集第 3 卷』筑摩書房。

柳田國男（1998）『青年と学問』『柳田國男全集第 4 卷』筑摩書房、初出 1928 年。

柳田國男（2006）『伊勢の海』『柳田國男全集第 23 卷』筑摩書房、初出 1902 年。

米山俊直・神島二郎・伊藤幹治（1973）「Ⅱ 旅と柳田民俗学」神島二郎・伊藤幹治『シンポジウム 柳田國男』63-119、日本放送出版協会。